ヤンデレ妹に愛されすぎて子作り監禁生活

Yandere Imouto ni Aisaresugite Kozukuri Kankin Seikatsu

小説 栗栖ティナ
挿絵 竹馬2号

立ち読み版

プロローグ　兄妹のごくありきたりな日常の光景　006
一章　お兄ちゃんは妹のもの　028
二章　兄妹の甘い（？）新婚生活　081
三章　二人だけの世界　128
四章　妹はお兄ちゃんのもの　178
エピローグ　兄妹のあまり普通ではない日常の光景　223

登場人物紹介

Characters

中田綾音（なかたあやね）

友哉の妹。重度のブラコンで、いつも友哉のそばにいようとする。いっしょにお風呂に入るのは日常茶飯事で、たまにいっしょの布団で寝ることも。

星沙也香（ほしさやか）

中田家の隣に住む幼なじみの少女。兄妹なのに仲のよすぎる友哉と綾音に対して、苦言を呈するのだが……!

中田友哉（なかたともや）

ごく普通の男子学生。綾音のことを「妹だから」と甘やかし気味で、何でも許してしまう。

プロローグ　兄妹のごくありきたりな日常の光景

「お兄ちゃん、アヤも一緒に入れて！」
浴室に乱入してきた妹の綾音を、中田友哉は床に座ったまま呆れ顔で一瞥する。
「綾音、お前なぁ……そろそろ一人で入るようにしろって言っただろう」
「むぅ、どうしてそんな意地悪言うの？」
「意地悪とかそういう問題じゃなくて……」
「問題ないでしょう。だって、アヤとお兄ちゃんは兄妹なんだから」
お風呂で兄妹水入らずのひとときを過ごす。
二人がまだ幼いのなら、微笑ましい光景と言えるだろう。
（俺達、もうそんな年齢じゃないんだから）
深い藍色の瞳を細めて微笑む妹を再び一瞥した友哉は、やれやれと首を振る。
自分より頭一つ分ほど背が低い彼女は、タオルすら巻いていない生まれたままの姿。
身体の前で腕を組んでいるので頂点だけは隠れているお椀型の形よい双乳は、まるでメロンを並べたような見事なサイズだ。
腰やふとももがほっそりと引き締まっている分、そこがより強調されている。

（って、いつまで見てるんだ、俺は！）

「とにかく、今日はゆっくり浸かりたい気分だから……」

言い訳がましく言いながら、自分は気恥ずかしさを我慢できず傍にあったタオルで下腹部を覆い隠して視線を背ける友哉。

その刹那、一瞬だけ視界の端を過った妹の下腹辺り。恥丘の部分には、左肩にかかっている長髪と同じ明るい茶色の薄い茂みが生えていた。

十分すぎるくらい女の魅力を漂わせる肢体。いくら家族といえども、無邪気に晒すのは普通ならためらうはずだ。

「いいでしょ～！　もう入ってきちゃったんだし♪」

それなのに当の本人はまるで恥ずかしがる様子もなく、あぐらをかいている兄の正面へ背を向けて座り込んできた。

揃えたスラリと長く美しい両足を前に投げ出し、すっかりリラックスした様子で友哉の胸板へもたれかかってくる。

「今日もお願い。アヤ、お兄ちゃんに髪の毛洗ってもらうの大好きなの♪」

そのまま上を向き、頬を淡い桜色に染めて明るく微笑む。

そんな妹の顔を見せられたら、ひたすら彼女に甘い友哉にはもう強く拒絶することなどできはしなかった。

「……わかったよ。いつまでも甘えん坊だな、綾音は」
呆れ顔で言いながら、壁際に置いてある彼女愛用のシャンプーやトリートメントを近くに引き寄せる。
「えへへっ、ありがとう、お兄ちゃん」
「はいはい。って、くっつきすぎだ。それじゃあ、洗えないだろう」
そう苦笑しながら、友哉はまるで子猫のように胸板へ後頭部を擦りつけて甘えてくる妹の肩を押し、身体を離した。
「俺、特別髪洗うのが上手いとは思わないんだけどなぁ……」
手の平でシャンプーを泡立て、長い茶髪を撫でるように洗い清めていく。
普段は左側でサイドテールにまとめているそれはわずかにウェーブがかかり、まるで絹糸のように滑らかで柔らかい。
シャンプーや石鹸とはまた違う、柑橘類系の甘酸っぱい匂いが漂ってくる。
いつまでもこうして触れていたくなる、実に魅力的な感触だ。
「お兄ちゃん……アヤの髪を洗ってくれるときって、いつも嬉しそうね」
「まあ、綾音の髪って柔らかくて触り心地いいからな」
また上を向いた妹の笑顔に、友哉は今更取り繕っても仕方ないと素直に返す。
「当然よ。アヤの髪にはお兄ちゃんの優しさがいっぱい染み込んでいるんだもん♪」

「はいはい、言ってろ」
平然と返す綾音に、友哉は自分のほうが気恥ずかしくなって視線を逸らす。
(本当、いくつになっても甘えん坊なのは変わらないよな)
早くに伴侶を亡くした友哉の父と綾音の母が再婚したのは、二人がまだ物心つく前。
血縁上は義兄妹だが、本人達にとっては血を分けた家族に等しい間柄だ。
兄である少年が幼稚園に入るくらいの頃から、それぞれ職場で重要な地位についていた両親は仕事に追われるようになり、子供達だけで過ごすことが多くなった。
『パパもママも忙しいから、自分が妹の面倒を見る!』
子供らしい真っ直ぐな使命感に突き動かされて世話をしてくれる兄に、一歳違いの妹である綾音は実によく懐いてくれた。
『お兄ちゃん、大好き!』
無邪気に微笑み、どこへ行くときもトコトコと後ろを――それこそトイレにだってついてこようとするほど慕ってくれる妹を見ると、この子をもっと可愛がってあげたいと思うようになり……それが十数年経った今も続いている。
家の中では、いつも友哉の隣が定位置。
同じ学園に通っているので登校時はもちろん一緒だし、休み時間にはちょくちょく教室へ顔を見せに来る。

二人とも特に趣味もなく帰宅部なので、帰りも一緒なのがほとんどだ。
授業中と寝ているとき以外、常にべったり。いや、寝るときも『怖い夢を見た』と言って友哉のベッドへ潜り込んでくることがある。
客観的に見て、重度のブラコン。そしてそれを本気で咎めずに受け入れてしまっている少年も重度のシスコンだろう。
（まあ、慕ってくれるのは嬉しいんだけど……）
髪を毛先から丁寧に洗い続けながら、何気なく視線を落とす。
気持ちよさそうにうっとりと目を細めている綾音の顔の下、さっきは腕で隠されていた胸の双丘が自然と視界に飛び込んできた。
お椀型の形よい隆起、その頂点を飾る突起は桜の花びらのように澄んだ薄桃色。
一瞬、頭が真っ白になって見とれてしまう美しさだ。
「ん～っ、お兄ちゃん、髪だけじゃなくて身体も洗ってくれる？」
綾音は正面を向いたまま、まるでそんな友哉の視線の先を察したかのように悪戯っぽく誘いかけてくる。
「甘えすぎだ！　それくらいは自分でやりなさい!!」
その声で我に返った友哉は、慌てて兄らしい威厳を取り繕って返す。
（何を妹の身体で興奮してるんだ、俺は！　鎮まれ、鎮まれ！）

シャワーを手に取って泡塗れになった綾音の髪を流しつつ、熱く疼き続けている自らの下腹部へ視線を落とし、必死に心の中で繰り返した。
甘えん坊の妹は脚の間に座っている。
股間に変化が起これば、覆い被さっているタオルなんて軽く持ち上げ、その先端が小ぶりで可愛らしい尻房の谷間へ触れてしまいそう。
すぐに気づかれてしまいかねない、危険な体勢なのだ。
目を瞑り、今日の授業で特に難しかった関数の問題を思い浮かべて気を逸らす。
しかし、そうすると髪から漂う心地よい香りがより鮮明に感じられ、それにも言い知れぬ胸の高鳴りを覚えてしまう。
（そりゃ、綾音は凄く可愛い。アイドルとか目じゃないレベルで可愛いけど、だからって妹相手にムラムラするとか、『お兄ちゃん』として最低だぞ）
目を閉じたまま、込み上げてくる自己嫌悪を噛み締めていた最中。
「ん～っ、じゃあ、アヤがお兄ちゃんの背中を流してあげるね」
そう言って立ち上がった綾音は兄の背後へしゃがみ込む。
慣れた手つきでボディーソープを手に取ると、泡塗れになった手の平でまだ目を閉じている友哉の二の腕を擦り始めた。
「んっ、おい、綾音。俺は自分で洗うから……」

「いいの、お礼だもん。それに……お兄ちゃん、今日は肩こってるんでしょう？　ついでにマッサージもしてあげたくて」

遠慮する兄へそう微笑みかけ、綾音は泡塗れの手を肩のほうへ滑らせてきた。

「肩こってるって……んっ……ふぅ」

手の平の付け根辺りで首筋をグイッと押されると、その程よい刺激に友哉は思わず深く息をついてしまう。

確かに昨日、宿題のレポートを仕上げるために長くパソコンを操作していたせいで肩こりを感じていたのだが、それを綾音に言った覚えはない。

そんな素振りを見せた覚えもないし、どうして見抜かれたのか不思議に思う。

「お兄ちゃん、今日歩いているときの姿勢が崩れていたの。肩の高さがいつもより二ミリくらい低かったから……多分そうだなって思って」

「へぇ、そんなことでわかるものなんだな」

まるでプロのマッサージ師みたいな眼力だと、友哉は素直に感心してしまった。

「当たり前よ。アヤはお兄ちゃんのことなら何でも知ってるんだから♪　お兄ちゃんはあまり肌が強くないから、こうして手の平で身体洗うほうが好きとか……」

そう言いながら肩甲骨の辺りを撫でるように洗ってくれた綾音が、背中の真ん中辺りで一度手の平を離し、傍に置いてあったタオルを手に取った。

「これより下のほう……腰に近い辺りはくすぐったくなるから、手じゃなくてタオルで擦るほうが好きなんだよね」
そう悪戯っぽく呟き、改めて泡立てたタオルで優しく擦ってくれる。
「あ、ああ、そうだよ。本当、よく知ってるな……」
好みを自分よりも把握しているようだ。
友哉は感心しながら心地よさに身を委ねる。
「お兄ちゃん、少し脇腹の辺りが引き締まってきたみたい。先週から、お風呂入る前に腹筋するようになったんだよね？　このまま続けたほうが健康にいいよ」
「そうだな。ってか、意外と早く結果出るもんだな」
綾音が優しく撫でてくれていた脇腹を見てみるが、自分では特に変わりなく見える。
（まあ、しょっちゅうこうして一緒に風呂入って見られてるし……それに……）
「やっぱり男の人の身体って筋肉凄いよねぇ。小さい頃は、アヤと同じくらいスベスベでプニプニだったのに。ふふっ、でも今のお兄ちゃんのほうが頼もしく感じる♪」
ふとももほうにまで泡塗れの手を滑らせてきた綾音は、兄の肩に顎を乗せてその感触を楽しんでいるようだった。
最近は照れて髪を流す以外は断っている友哉と違い、そんなことまるで気にしない綾音は兄妹のスキンシップをとても好んでいる。

入浴の度にこれだけ弄られていれば、詳しくなって当然なのかもしれない。
（小さい頃からこうなんだよな、綾音。本当、いつまでも　　なんだから）
身体だけではなく、心も年相応に成長してくれないものか。
いや、実際にそうなったら少し寂しいかも。
そんな複雑な思いが胸を過ったとき、綾音がじゃれつくように兄の頬へ自らの火照った頬をすり寄せてきた。
「んぁっ⁉　お、おい、綾音！」
ぷっくりと柔らかい、つきたてのお餅みたいな感触。昔からまるで変わらないその心地よさに思わず声を上擦らせつつ、横目で慌てて問いかける。
「えへっ、お兄ちゃん～、髪も洗ってあげようか？」
「んっ、あ、ああ。って、そう言えばシャンプー切らしてたような……」
断ったところで、すっかりノリノリの妹を止めることはできない。
そう思って素直にうなずいた友哉だったが、すぐそのことに気づいた。
仕方ない、綾音が使っている女性向けのものを今日は借りようか。
そう思ったのだが。
「大丈夫、アヤが昨日、ちゃんと買っておいたよ♪」
そう言って、綾音は浴室の扉のほうへ手を伸ばした。

入ってくるときに持ってきていたのだろう、封を切られたばかりのシャンプーボトルを手にし、それを見せつけるように兄の目前で振る。
「あれ……」
それを見て、友哉は思わず目を丸くした。
それはいつも愛用しているものとは違う銘柄だ。だが――。
「お兄ちゃん、この前、このシャンプーのＣＭ見て使ってみたいって言ってたよね」
「うん、よく覚えてたな」
それはＴＶを見ながら、何気なく呟いた一言。
次にシャンプーが切れたとき、覚えていたら買ってみようくらいの気持ちだった。
「言ったでしょう。アヤはお兄ちゃんのことなら、な～んでも知ってるの」
「ほ、本当にそうだな。いや、さすがに知りすぎ……」
「お兄ちゃん、嫌？　アヤに知られたくないこと……あるの？」
驚きを隠せない友哉が思わず呟いた途端、綾音が抑揚のない小声で呟いた。
その表情は今までと打って変わって能面のように感情が読み取れないものになり、健康的な桜色に染まっていた頬に暗い影が差している。
「兄妹はお互いを深く知り合って、仲良くするものだとアヤは思うよ」
アヤの囁く声に合わせ、ミシッと何かが軋む音が浴室に響く。

ふと見ると、新品のシャンプーボトルに少女の白魚のように美しい指が食い込み、わずかに潰れてしまっていた。
それを見て、友哉は妹の地雷を踏んでしまったと慌てて弁明を始める。
「お、おい、怒るなって。記憶力いいなって驚いただけだから。その、わざわざ買ってきてくれてありがとうな」
「じゃあ……嫌じゃなかった？」
「嫌なわけないだろう。綾音は気が利くよ、将来、絶対いいお嫁さんになれるぞ」
上目遣いで問いかけてきた妹へ、友哉は笑顔でそう断言する。
（ちょっと情緒不安定気味なところは、玉に瑕（きず）だけどな）
今みたいに綾音の気づかいを無にするようなことを言うと、必要以上にショックを受けて機嫌を損ねてしまうことが少なくない。
フォローすればすぐに笑顔を取り戻してくれるので、あまり気にしてはいないが。
「いいお嫁さん……お兄ちゃん、本当にそう思う？」
今もさっきの暗い表情が嘘のように、頬を赤らめて輝く笑顔を浮かべている。
「俺が綾音に嘘をついたことなんてないだろう」
「うん、そうだよね。ふふっ、ありがとう、お兄ちゃん♪」
そう声を弾ませた綾音は、まるで子犬のように鼻先を首筋へ擦りつけてきた。

「お、おい、くっつきすぎ……んっ」
洗い立ての茶髪から漂ってくる甘い香りを思いきり嗅いでしまい、一瞬、背筋に電流が走ったような昂りを覚えてしまう。
おまけに身体をすり寄せてきているせいで、胸のふくらみが背中に当たってきた。
さすがに乳房が押し潰されるほど強くではないが、他の場所よりもさらに滑らかでしっとり吸いついてくるような肌に撫でられる。
元々くすぐったがりで敏感な少年は、思わず腰を浮かせそうになってしまう。
時々擦れる、ぷっくりとふくらんで少し硬い感触。
その正体が間違いなくさっき一瞬だけ見てしまった桜色の乳突起だと察すると、必死に鎮めようと努力していた下腹部の疼きが鼓動に合わせてドクンドクンと盛り上がってきた。
「んっ、洗い立てのお兄ちゃんの匂い。ちょっと薄いけど、でも、石鹸の匂いと混じってこれはこれで……はぁ、はふっ、んっ♪」
気づかれていないだろうかと横目で確かめると、さっき丁寧に揉み解してくれた首の付け根へ唇を寄せる彼女は、目を細めて妙にうっとりとした顔をしている。
匂いフェチなところがあるのか、何年か前からこうして妙に兄である自分の匂いを嗅ぎたがるようになってきた。
あまりいい癖とは言えないが、幸せそうな顔を見ていると止めるのもためらわれる。

（でも、さ……さすがに限界だ！）
嗅がれるのはまだしも、背中をコリコリと程よい硬さの肉粒で撫でくすぐられる感触には長く耐えられそうにない。
妹の目前で、決してしてはならない反応を見せてしまいそうだ。
「綾音、は、早く髪洗ってくれよ！　のんびりしてたら湯冷めするし、わざわざ買ってきてくれたシャンプーの使い心地も試してみたいからさ」
「うん、そうだね。お兄ちゃんがもし風邪引いたらアヤも悲しい。もちろん全力で看病するけど、そういう問題じゃないし……ンッ……」
綾音は少し名残惜しそうにしていたが、聞き分けよく身体を離してくれた。
「じゃあ、目に入らないようにしっかり瞑っていてね、お兄ちゃん」
「わかってるって。よろしくな」
小さい頃、彼女の髪を洗ってやるときにいつもかけてあげていた台詞に苦笑しつつ、友哉は言われたとおりに目を閉じる。
（やれやれ……兄妹のスキンシップも、この年になると気を遣うよな）
頭を指先で丁寧に洗われる感触に浸りつつ、友哉は胸の中でそう息をついた。
「ふぃ～……」

湯船に肩まで浸かり、一日の疲れを呻き声と共に吐き出す。
さっきまで一緒だった綾音は先に出てもらった。
家庭用の湯船は何人も一緒に浸かれるほど広くはない。
こうして一人のんびり身体の芯まで温まるのが友哉の好みだと、兄のことは何でも知っている妹も理解してくれている。
「それにしても……いいのかなあ」
綾音に綺麗さっぱり洗ってもらった濡れ髪を一房指で摘まみ、首を傾げた。
彼女が甘えん坊なのは今も昔も変わらないが、三ヶ月ほど前、両親が揃って一年弱の海外出張へ出かけてからはよりエスカレートしてきている。
前は週に一、二度だったお風呂への乱入も最近はほぼ毎日だ。
「父さんと義母さんがいなくて、寂しいからかな……」
二人が旅立つ前日、『こっちのことはまったく気にしないで。アヤはお兄ちゃんと二人なら何年でもへっちゃら！』と笑顔で見送っていたのを思い出す。
あれは、旅立つ二人に心配をかけないための演技だったのだろうか。
そんな健気な妹の心情を思うと、しっかり支えてやらなければいけない。
だが――。
「俺も男だから……はぁ、いかん、いかんぞ！」

気を緩めると、まぶたの裏に焼きついている妹の生まれたままの姿を、間近で嗅がされた甘酸っぱい髪の香りを、背中を乳突起でくすぐられた心地よさを思い出してしまう。

下腹部が込み上げてくる熱でジンと痺れ、もう我慢する必要もないと湯船の中で怒張は雄々しく勃起していた。

（妹に欲情するとか……最悪だ）

綾音は自分を兄として慕い、甘えているだけだ。

それを裏切ることだけは絶対に避けなければいけない。

「もうちょっとスキンシップ減らすように言うか。……でも、それを言うと綾音の奴、凄く悲しそうな顔するし。ぶっちゃけ、俺も寂しいよな……」

頭を抱えてしばし葛藤し、結局は現状維持しかないといつもの結論に達する。

自分がしっかり『お兄ちゃん』であり続ければいい。それだけなのだ。

そう決意を固めると、肉幹の滾りも自然と鎮まってきた。

「さてと、それじゃあ上がるとしますか」

呟きながら湯船から出たとき、ドア越しに綾音の影が見えた。

風呂から上がったら洗濯をすると言っていたのを思い出す。

今、出ていくのはちょっと気恥ずかしくもあるが、さっきまで一緒に入っていたのだから意識しすぎるのもかえっておかしい。

少し悩んだ末、友哉は腰にしっかりとタオルを巻いてから出ることにした。
「上がるぞ～、綾音、いつも洗濯ありがとう……な」
ドアを開けると、予想どおり脱衣所に置かれた洗濯機の前に綾音が立っていた。
友哉が優しく洗ってあげた長い茶髪を左肩へかかるように桃色のシュシュでサイドテールにまとめ、頭にはそれと対照的な右寄りにリボンがついたヘアバンドをつけている。
服はそれらの色合いや雰囲気に合わせた、フリルの多いピンクのワンピースドレス。可愛らしい服を好む彼女お気に入りの格好だ。
部屋着にしてはちょっと気合いが入りすぎていると友哉は思うのだが、『お兄ちゃんの前で手を抜いた格好はできない』というこだわりらしい。
そのことについては特に何か言うこともないのだが――問題は、そんなお兄ちゃんっ子の妹が恍惚の表情で顔を埋めているものについてだ。
「それ、俺の服……」
「んふっ、はぁ、はふっ、お兄ちゃんの匂い……濃い匂い～」
入浴前に脱ぎ、洗濯かごに放り込んでいた学園の制服一式。
綾音は夢中で鼻を鳴らし、両手で抱えたそれの匂いを嗅いでいたのだ。
「シャツより、こっちのほうがいい匂い。特に……ここ……」
何か小声で呟きながら、シャツではなく制服のブレザーズボンのほうへ鼻先を寄せる。

息を荒くしながら裾から膝のほう、そしてファスナーがついた股間の辺りへ近づいていくのを見守っていた友哉は、さすがにそろそろ黙っていられないと突っ込んだ。
「綾音、何やってるんだってば！」
「んっ、お兄ちゃん？」
軽く頭を小突いて注意すると、顔を上げた妹は兄が何を怒っているのかわからないと言わんばかりにきょとんとした表情を浮かべた。
「いや、洗濯物の匂いなんて嗅いでどうするんだよ。汗臭いだけだろ」
風呂場で直接首筋の匂いを嗅がれたのも照れくさかったが、これはそれとはまた違う背中がムズムズとする羞恥を感じる。
だが、友哉のそんな言葉を聞いても、綾音は怪訝そうに小首を傾げるだけだった。
「つけ置き洗いが必要かもしれないから、確かめていただけだよ？　ついでにお兄ちゃんの体調管理もできるし」
「に、匂いで確かめるのか？」
洗濯物はこの何年か、任せて欲しいと言う彼女に頼んでばかりだ。
汚れ具合を判断するのに、そういう方法もあるのだろうか。
（まあ、なくはない……かな？）
疑問を拭えないが、とりあえずそう納得しかけたときだった。

再び手にした洗濯物のズボンへ顔を埋めた綾音が、不意に表情をこわばらせた。
「……臭い」
「そうだろう？　だから、別の方法で……」
「お兄ちゃんの匂いじゃない……」
友哉の声に耳を貸さず、サイドテールの妹は乱暴な手つきでズボンのポケットを弄り、そこからレースのついた白いハンカチを取り出した。
「これ、お兄ちゃんのじゃないよね」
「えっ……あ！」
綾音が手にしたそれを見て、少年はふと思い出した。
「そうだ、すっかり忘れてた！　それ……」
「さーちゃんのだよね。このミルクっぽい臭さ……間違いない」
友哉が言うよりも早く、そのハンカチに軽く鼻先を当てた綾音が眉をひそめて言う。
「う、うん。お前、鼻いいんだな……」
匂いでわかるものなのかと驚きつつ、うなずき返す。
それは綾音が言うとおり、彼女が昔から『さーちゃん』と呼ぶ友哉と同じ年の少女――隣の家に住んでいる十年来の幼なじみ、星沙也香（ほしさやか）から借りたものだ。
「どうして、お兄ちゃんのズボンにさーちゃんのハンカチが入ってるの？」

「いや、それは……」
「アヤに隠れて二人で何かしたの？　そんなの……寂しい……」
少年に説明する間も与えない勢いで、深い藍色の瞳を半白眼にした妹が右手に持つハンカチを突きつけてくる。
さっきまでの甘く上機嫌な声が嘘のような、冷たい囁き。
言い知れぬ迫力に気圧され、友哉は思わず一歩後ずさりしてしまう。
「アヤには言えないようなこと、してたの？　そんな……」
「いやいや！　今日、学園にハンカチ持っていくの忘れちゃってさ。あいつが予備持ってるって言うから借りたんだよ」
「そっか。……うん、さーちゃんがやりそうなことだね」
「ああ。あいつ、そういうところ細かく気配りしてくれるからな」
男なんだし、一日くらいはズボンで拭いて誤魔化すと言ったのだが、何かと生真面目な幼なじみはそれを許さず、押しつけるように貸してくれたのだ。
「違うよ……お兄ちゃんの前でいいところ見せたがってるだけ」
「んっ、何か言ったか？　というか、それは明日にでも返さないと……」
うつむき、何か聞き取れない小声でぶつぶつ言ってる妹の手から友哉はハンカチを取ろうとする。

だが、綾音はそれを拒むように手を後ろへ隠してしまった。
「ダメだよ！　ちゃんと洗ってから返さないとっ‼」
「えっ、あ……そうか、そうだよな」
爪先立ちで睨みつけてきた綾音に、友哉はハッと気づいた。
妹の言うとおり、借りたものは洗って返すのが礼儀だろう。
「しっかりつけ置き洗いして、お兄ちゃんの匂いを完全に消さないと。アヤ以外の人がお兄ちゃんの匂いを嗅ぐなんてありえない。そんなの許さない……」
「えっと、それじゃあ綾音に任せてもいいのか？」
ハンカチをギュッと握り締めたまま、また聞き取れない大きさの声で囁く妹。
何となく妙な雰囲気だが、一緒に洗濯してくれるなら任せてしまっていいだろう。
「うん、アヤに任せて。新品みたいに洗ってあげるから！」
「お、おう……」
ハンカチを握ったまま、にっこりと目を細めて笑う綾音。
何だか胸に引っかかるものを感じた友哉が、言葉尻を濁らせた直後。
「じゃあ……これ、手間賃ね♪」
また爪先立ちで背伸びをしてきたサイドテールの妹が顔を寄せてきた。
ピンクローズの花びらのように鮮やかな色合いの唇が、ちゅっと可愛らしい音を鳴らし

ながら少年の頬と接触する。
風呂上がりでまだ火照りが抜けていないのに、それでも熱いと感じてしまう。
そんな不意打ちに目を見開く兄へ、綾音は悪びれず楽しげに微笑む。
「えへっ、やっぱり服よりも直接嗅ぐほうが落ち着くな。お兄ちゃんの匂い」
「いや、嗅ぐっていうか、今、キス……」
「お兄ちゃんもしてくれる？　アヤにご褒美にちゅー！」
上機嫌の妹は、また背伸びをして自らの右頬を差し出してきた。
こういった挨拶代わりのキスもまた、甘えん坊な妹のお気に入りなのだ。
「お前、本当……」
『いつまでも甘えん坊だよな』と、続きの言葉を友哉はグッと飲み込んだ。
何だかんだ、こうして甘えられることが好きなのだから、自分も。
（ま……いいよな、兄妹仲睦まじくってことで）
そう自分を納得させつつ、妹想いの兄はぷにぷにと柔らかそうな頬へ自らの唇をそっと押しつけた――。

「大切かぁ……ふふっ、お兄ちゃんもアヤのことを大切なお嫁さんだって思ってくれてるんだ。うん、そうだよね。ごめんね、変なこと聞いちゃって」
「えっ、い、いや、俺は……」
「アヤはお兄ちゃんのお嫁さんで、お嫁さんは旦那さまのチンポ管理が大切なお仕事。だから……遠慮しないで、アヤの夢を見て元気になっちゃった朝勃起チンポ、アヤのお口と胸でたくさん気持ちよくなって……ビュルビュル元気な射精見せて！」
訂正しようとする兄の声などお構いなく、光の消えた目で微笑む愛妹は掴み潰した双丘を再び激しく揺さぶり始めた。
「ふぁああっ！　綾音、と、止めて……んぉっ、おお⁉」
「だーめ。もう止まらないっ、アヤのお兄ちゃん大好きって気持ち、誰にも止められないんだからぁっ。あはっ、好きぃっ、お兄ちゃん！　お兄ちゃんチンポも好きぃ！」
部屋中に響き渡る綾音の甘ったるい叫び。
昂り焦る気持ちを表すように、左右のふくらみが上下左右へ荒々しく動く。
さっきまでと違って動きのタイミングがずれていて、与えられる刺激も不規則。
雁首の右側が乳肉に食い込んで強く弾かれたかと思うと、今度は左側の竿肌が根元から先端まで一気に強く擦られる。
左右の乳房が押し合って潰れた部分に裏筋を挟まれて刺激されたかと思えば、亀頭のほ

うへ向かって激しく扱かれて、込み上げてきている先走り汁を搾り出されてしまう。
「はぁ、んふっ、お兄ちゃんのチンポ汁ぅっ、匂い濃くなってきたね。アヤの夢を見てドロドロに濃くなっちゃったザーメン、ちゃんと搾り取るよ。全部アヤのものだよ」
ダラダラと垂れ流れるカウパー腺液を見て舌なめずりしたサイドテールの妹が、我慢できないと言わんばかりにまた亀頭へむしゃぶりついてきた。
鼻の下がだらしなく伸びてしまうくらい頬を窄めて吸い、口内では舌が亀頭を上下左右へ休みなく舐め弾く。
「うぁっ、綾音、も、もうやばいって！　そんな……うぅっ、で、出るっ」
愛しい妹が、こんなにも艶めかしい姿を晒して奉仕してくれている。
その光景で過敏になった快感神経に、口と乳房を惜しみなく使った奉仕はあまりにも強烈すぎる刺激だった。
目の前で何度も白い火花が散り、背筋を震えと共に絶頂の予感が駆け上ってくる。
「んぷっ、はぁ、らしてぇ♪　お兄ちゃんの朝チンポ汁ぅっ、アヤのお口ぃっ、お嫁さん口マ〇コにビュルビュルするの！　アヤに出すのが当然なのぉっ!!」
一度口を離して蕩け顔で叫んだ綾音は、再び先っぽを咥えるや否や、前歯で張り詰めた亀頭粘膜を軽く甘噛みしてきた。
ダメ押しとばかりに火照る乳肉を縦長の楕円に潰れるくらいグイッと中央に寄せ、幹竿

を根元から肉傘の真下まで圧迫してくる。
愛妹の鼓動に合わせてわずかに震える乳肌の刺激、鈴口へストローのように刺さる丸められた舌先。執拗に射精へ導こうとしてくる綾音の奉仕に、抵抗を続けてきた少年の理性はまるで紙くずのように軽く吹き飛ばされてしまう。
「イクッ、で、出るっ、うぐっ、うわあああ！」
ビュクゥッ、ビュルルッ、ビュルルルンッ！
反射的に腰をわずかに浮かせた直後、押しつけられた双丘を押し返さんばかりの勢いで幹胴がふくらむ。尿道を駆け上ってきた熱液は、そのまま先端を咥え込んだ愛妹の口内へ遠慮なくぶちまけられた。
「むくっ、んむぅぅっ～！　ひぅんっ、あはっ、おひりゅっ、お兄ちゃんのせーしぃ、おくひに……んごっ、んんんっ!!　んぷっ、おぇ……じゅるっ、ちゅうう!!」
喉奥を乱暴に打ち叩く、力強い射精。その勢いに軽くむせて涙を滲ませながらも、綾音は決して唇を緩めることなく白濁を口内に溜めていく。
そしてゴクゴクと見せつけるように大きく喉を鳴らし、唾液と混ざって少し薄められたそれを何のためらいもなく飲み込んでいった。
「綾音、の、飲んでる……何で、そんな……」
「はむっ、はぁ、お兄ちゃんのせーしぃ……旦那さませーしはぁ、全部お嫁さんのものだ

もん。無駄にしたらダメなのっ♪　ちゅっ、んちゅっ、無駄にしたくないぃ……」
昨日、手で受け止めた精液を愛しげに舐めたときと同じように、綾音はその青臭い味わいを楽しむように目を瞑って浸っていた。
「お兄ちゃんのザーメン、凄く濃いよ。ドロドロで噛めちゃうくらい。んふっ、アヤへの想いがたくさん混ざってる精液ぃ……美味しい。凄くエッチで美味しい」
口内の肉槍に歯を立てないよう、軽く咀嚼しながらじっくりと白濁を堪能する愛妹。
本当にその味わいを気に入っているのだろう。恍惚と肩を震わせ、乳房を掴む指にも感極まる想いを訴えるように力が篭もる。
友哉は絶頂の余韻に息を切らしつつ、自らの白濁を心の底から愛しげに受け止めてくれている綾音の姿を見守ることしかできなかった。
（こんなこと、いけないのに！　それなのに……）
自分の精液をこんなにも嬉しそうに味わってくれる妹の姿に、思わず叫びたくなるほどの悦びが腹の底から込み上げてきてしまう。
自分がどれだけ綾音のことを愛しているのか。
改めてそれを実感し、自己嫌悪するしかなかった。
「ぷはぁ、んふっ、ちゅぅ……お掃除もしないとね。お兄ちゃんの大事な赤ちゃんの素、残ってたら勿体ないし……ちゅぱっ、じゅるるっ、れろぉっ、ちゅぅっ！」

「ダメ、止めちゃ！　このままぁ……このまま一緒にイクのっ♪」
「え……って、うわっ、ああ！」
ズリュゥッ、ニチュルゥッ……ズップッ、ジュブリュッ！
今まで受け身になっていた愛妹が、涎で濡れた桜色の唇を舐めるや否や、自ら前後に大きく腰を振り動かし始めた。
パチンッと音を響かせて尻房を兄の腰へ叩きつける度、揉み潰された乳房の先端を飾る肉粒が歓喜に震え、肉穴全体がキュンッと収縮する。
「綾音、ちょっと……今、動かれると……んくっ、うっ、うう！」
「らめぇ、これぇ、こういうのアヤもずっと想像してたの！　ずっとずっと、お兄ちゃんとこうしたいって思ってたんだから。んぅっ、もっとするのぉっ♪」
情けない声で訴える友哉に構わず、綾音はリズミカルな腰使いを継続する。
両手をシンクについて身体を支え、背筋を仰け反らせたまま上体を前後に揺らす。
膣粘膜は肉竿にしゃぶりつくかのように大きくうねり、雁首から裏筋まで敏感な部分を余すところなく刺激してきていた。
「あぁっ、綾音っ、俺、もぉ……気持ちよすぎる、こんな……はぐっ、ああっ」
幹胴のあちらこちらで歓喜の疼きが断続的に弾け、少年の理性はまた途切れる。
いつの間にか乳房を力いっぱい揉み潰し、自らも腰を振り出してしまっていた。

「いい、いいよぉ！　お兄ちゃんも動いて。あはっ、そう、こうして朝から夫婦仲良く甘えてぇ、いっぱいエッチするぅっ、ご飯も忘れて子作りしちゃうくらいベタベタな新婚生活が好きぃっ、アヤ、そういうの憧れるぅっ!!」

「新婚……なんて、俺達、兄妹……くぅっ、はぐっ、ああっ」

「いいの、結婚できる兄妹だから大丈夫だよっ。毎日、今朝みたいに元気なお兄ちゃんをエッチに起こして、たまには逆にお兄ちゃんがアヤを起こしにきてくれるっ、優しいキスで起こしてくれるのぉっ……はぁっ、そういうのもいいなぁ」

「綾音、何を言って……んっ、ああっ」

「はぁはぁ、それでね、お兄ちゃんのご飯は毎日アヤが作ってあげて……美味しくできたら、ご褒美にこうしてたくさん愛してもらうの。うんと突いてもらって……ひぅっ、元気な赤ちゃんできるように子宮に濃いお汁ぅっ、せーしもらうっ」

妖しい雰囲気を漂わせる瞳で天井を見上げつつ、理想の未来図を語る愛妹。

その声に合わせて動きは激しさを増すばかり。引きずられるように、友哉も前後に振られる綾音のヒップ目掛けて夢中で腰を突き出し続けていた。

二人の動きが微妙にずれ、深く刺さったかと思えば浅いところを素早く擦る、そんな不規則な抽送を生み出す。

表皮が裂けそうなくらい勃起した肉竿が膣内をギチギチに埋め、摩擦は愛蜜でふやけた

表皮が溶けてしまいそうな強さになっている。
深く飲み込まれる度に幹胴が脈打ち、根元に溜まったマグマのような迸りの予感が一回り大きくふくらむ。友哉はもうまともに言葉を紡ぐこともできず、ただ妹の与えてくれる禁忌の快楽に身を委ねて腰を振り動かすだけになっていた。
「お兄ちゃんもっと動いて！　旦那さまのたくましい腰使いぃっ、アヤのお嫁さんオマ〇コに覚えさせて!!　好きぃ、お兄ちゃん、大好き……はぁっ、あはっ、ふぁああっ」
「お嫁さん……っ……うぅっ」
「そう、アヤとお兄ちゃんはもう夫婦なの、夫婦になったんだよ。出かけるときはいつも夫婦一緒で仲良く腕を組んで……もう他の子とはダメ。さーちゃんでもダメだから！」
振り返って命じてくる愛妹の声を呆然と聞きながら、友哉は改めて『夫婦』という言葉を頭の中で反芻（はんすう）していた。
愛しい妹とすべてのしがらみを乗り越えてそうなれたら、どれだけ幸せだろう。
自分も綾音も同じ気持ちなら、それでいいのかもしれない。
快楽で理性が茹だり蕩け、そんな想いに気持ちが傾いていく。
「綾音、俺、俺は……くぅぅっ！」
もう我慢できない。
その狂おしい衝動を伝えるように、剛直を収縮する肉壺の深くへ突き立てる。

同時に力いっぱい乳房を揉み潰すと、大きなふくらみの奥から想像以上に速く高鳴る綾音の鼓動を感じ取ることができた。

彼女も自分と同じように昂り、求めてくれている。それが改めて実感でき、気が遠のくような悦びが下腹部から脳天まで込み上げてきた。

「あはっ、うん、いいよっ、きてっ♪　このまま中で、子宮に出して！　夫婦のセックスはせーしを全部子宮に出さなきゃダメっ、子作りセックス以外禁止なんだから♪」

射精の近づきを察したサイドテールの妹は声を弾ませ、度重なる衝突で赤く腫れぼったくなった尻房を少年の腰へグリグリと擦りつけてきた。

グチュリと艶めかしい音が赤く充血した膣口から漏れ、十分に蕩けきった子宮口に鈴口がすっぽりと埋まる。蜜汁で蕩けきり、もう粘液状になっているのではないかと思ってしまうくらい柔らかく蠢く膣壁が奥へ向かってうねり、幹胴全体が扱かれた。

「綾音っ、イィッ……くっ、もう、俺……うぐっ、うう！」

より深くまで沈んだせいで、溜まっていた愛液が穴口からゴボリと溢れる。

漂ってくる蜂蜜のように甘ったるい匂い。もう妹と一緒に昇り詰めることしか考えられないでいた少年は、それに浸りながら込み上げる欲情を解き放つ。

ドップゥッ、ビュルブブゥッ、ビュルゥッ、ドップウウウウッ!!

「きゃうんっ、きたぁっ、あはああ！　子宮に熱いのぉっ、昨日より熱くてネバネバの精

子きてるぅ！　イィッ、子宮せーし塗れになってぇ……イィッ、イクゥゥ♪」
甘ったるく上擦る綾音の嬌声を聞きながら、友哉は竿の脈動に合わせて腰を突き出し、大量の熱液を膣奥へ打ち込んでいった。
ずっと締まりっぱなしで緩むことがない肉道に促されるまま、込み上げてくる雄汁を遠慮なく放つ。子宮口に熱液がビチャリと降りかかる度に愛妹は背筋をくねらせ、揉み潰す乳房の奥から伝わってくる鼓動の音も大きく跳ね上がった。
「はへぇ……凄いぃっ、キッチンでお料理じゃなくて赤ちゃん作っちゃってるぅっ、お兄ちゃんとアヤの愛の証孕むぅっ、いっぱい孕むよぉっ♪」
歓喜の甘い叫びに合わせ、放ったばかりの白濁に塗れた膣粘膜が熱く震える。
押し潰さんばかりに圧迫し、奥へ向かって生き物のように竿肌を這う。
最後の一滴まで残さず子宮へ注ぎ、絶対に孕ませて欲しい。
そんな狂おしい想いが伝わってくる肉壺の動きに、友哉は何一つ抵抗できずにただ恍惚と吐精を続けていく。
長い射精はたっぷり一分近くも続いただろうか、根元に感じていた熱い感触が綺麗さっぱりなくなると、代わりに強烈な疲労感が肩にのしかかってきた。
「うっ、はぁ……で、出た、全部。……くぅ……」
「うん、もうアヤの子宮たぷたぷっ。お兄ちゃんの精液でいっぱいにしてもらえて嬉しい

よ。朝からたくさん子作りセックスなんて、本当に新婚さんだよね。これで赤ちゃんできたかな。ううん、きっとできてる！」
「はぁ、はぁ……赤ちゃん……か」
綾音が幸せそうに呟く声で、友哉はようやく落ち着きを取り戻した。
すっかり我を忘れていたが、また妹の膣内で果ててしまったのだ。
（本当に赤ちゃんできてたら……どうするんだよ）
無論、全力で責任を取るが、それで済む問題でもない。
情けなく流されてしまったことへの罪悪感が胸いっぱいにふくらむ――が。
「昨日みたいにアヤが動くのもいいけど……こうしてお兄ちゃんにいっぱい求めてもらったほうが満たされる感じがする。愛してもらえてる……夫婦になれたんだって実感できて幸せ……お腹、せーしで温かくなるのも凄く……いぃ。あふぅっ」
恍惚と頬を緩める綾音を見ていると、背中がくすぐったくなるような喜びが込み上げてくるのを抑えきれない。
（俺……綾音が好きだ。やっぱり……大好きだ）
だからこそ、こんな風に突っ走ってしまってはいけないのではないか。
友哉は綾音と繋がったまま、その葛藤にほぞをかむ。
「お兄ちゃん……まだ気にしてるの？」

額に張りついた数本の髪を指で払いながら、サイドテールの妹が振り返る。
「お兄ちゃんとアヤが幸せなら、何も悪くない。それで間違いだって言うなら周りがおかしいんだよ。だから、しばらく二人っきりで暮らそうね。お兄ちゃんがアヤのことしか見られない……他のことなんてどうでもいいって思えるようになるまで」
そこで言葉を止めた綾音は、何も言えず押し黙る友哉を見つめたまま、片手でエプロン越しに自らの下腹をそっと撫で回す。
「きっとすぐ……だって、お兄ちゃん……んふっ、はぁ、一回で子宮いっぱいになっちゃうくらいアヤを孕ませたいって思ってくれてるんだもん♪」
「綾音……」
ゴボッと結合部から放った白濁の残滓が溢れてくる音を聞きながら、友哉は何も言い返せずに押し黙ってしまう。
「お邪魔虫がいない、二人っきりの世界。……ふふっ、いっぱい楽しもうね」
一途な愛で走り続ける妹の言葉に乗ってしまっていいのか、どうか。
また光の消えた目でうっとりと呟く愛妹の横顔を見つめたまま、友哉は決断を下せずに彼女と繋がったまま思い悩み続けるのだった。

肉竿と粘膜の密着感はより強くなり、入れた瞬間一つに溶け合うよう。
艶めかしく蠢く壁面の皺は、雁首の裏側や裏筋の真ん中辺りといった特に敏感な箇所に触れると途端に大きくうねり出す。
「気持ちいいでしょう？　大好きなお兄ちゃんのチンポ、旦那さまチンポにご奉仕する専用マ○コっ、いっぱい精液搾り取ってたくさん孕むお嫁さんマ○コぉっ、はぁ、んんっ、好き……アヤもこの感触好きぃっ、すればするほど気持ちよくなってくるの」
弱々しく悶える兄を正面から見つめ、恍惚と頬を染めて微笑む愛妹。
相変わらず目に光はなく、言い知れぬ狂気を漂わせている。
下腹部が蕩けてしまうような快感に襲われながら、友哉は最愛の妹にそんな目をさせてしまっている自分の不甲斐なさがどうしても許せない。
（俺……俺は……）
彼女への想いを捨てきれないなら、潔く受け入れるべきか。
綾音が周りなどどうでもいい、二人だけで幸せになれればいいと言うなら。
だが、自分のせいで愛妹が世間から孤立してしまう姿を想像すると、どうしてもためらいを捨てきれない。
（悩んでる場合じゃないだろう、もう）
覚悟を決めなければいけないが、もう意識朦朧としてまともに言葉も紡げない。

この長い監禁生活で心身の消耗が著しく、人生を左右する大きな決断をするにはあまりにも余裕がない状況だ。
「お兄ちゃん、どうしたの？　気持ちよくない？　……アヤとエッチするの、嫌？」
あまり喘ぎもせずに押し黙る少年を見て、膝上の綾音が不安そうに小首を傾げる。
「俺……は……」
「お兄ちゃんは……アヤのこと嫌いになった？　それとも……まだ、他の女の子のことが気になる？　……さーちゃんとか」
「気になるって……んっ、あぁっ、そ、そういう意味で気になる女は他にいないよ。綾音の考えすぎだ。全部……」
「そんなことない！　お兄ちゃんは格好いいし、優しいしっ……少なくともさーちゃんは間違いなくお兄ちゃんのこと大好きなんだから。あはっ、んん！」
愛妹は荒々しく跳ね上がる声に合わせて腰使いを加速させ、暗い瞳を悲しげに伏せる。
「お兄ちゃん……アヤの考えすぎだって言うなら、ちゃんとそれをチンポで証明して。アヤのお腹にお兄ちゃんのお嫁さんになれた証を孕ませてよ」
「そ、それは……まだ早いって。俺達は……」
「早くない！　欲しい……アヤ、お兄ちゃんのものになれたって実感したい！　それがないと、いつまで経っても安心できないっ……ずっとずっと不安だよ!!　出してっ、うんと

濃くてすぐに受精できちゃうせーし、アヤにたくさん種付けしてっ！」
見開いた目に大粒の涙を浮かべて訴え、綾音はその長いサイドテールの髪や乳房を派手に揺さぶりながら腰を振る。
ジュリュゥッ、ズチュッ、ズップッ、ヌチュルウウ！
「そんな、な、中に、また……あぐっ、ああっ」
もうこの数日で数えきれないほどしてしまったことだが、まだ葛藤は拭えない。
だが、膝上で愛妹のヒップが弾み、肉槍が傘の辺りまで抜けかかったところで勢いよく膣奥まで沈む、そんな息つく間もない抽送快感に、とても耐えられそうになかった。
「んふっ、あはぁ、そうだ……濃い精液出るようにもっとご飯も食べないと。タンパク質も大事だけど、お野菜でビタミンも……ね、お口開けて！」
綾音はもう箸を持つのももどかしくなったのだろう、右手のそれを卓上に放り投げ、代わりに皿からミニトマトを摘まみ上げた。
それを口に放り込んでモグモグと咀嚼しつつ、息絶え絶えの兄と唇を重ねる。
「むちゅっ、んぷっ、ふぁぁっ、はふっ、れろぉ……たぁっ、食べて……んふっ、アヤの味ごとぉ……いっぱい。じゅるるるっ、ちゅぱっ♪」
「んぁっ、あああ！　はむっ、んぅ、むううっ」
噛み潰されてグチャグチャになったミニトマトが、舌先で無理矢理押し込まれる。

甘酸っぱさが口内いっぱいに広がり、その中にたっぷりと混ぜ込まれた綾音の柑橘類に似た香りが濃厚に漂う。
「ほらぁっ、もっと……舌、絡めて……んふっ、じゅるるぅ、ちゅう！」
「あ、あむうううっ、はぁ……ちゅっ、綾音……れろぉっ」
赤い果汁に塗れた舌同士は、今までよりもねっとりと濃厚に絡むようになった。
背筋がゾクゾクと震えてしまう、背徳の味わい。
身体の芯が頭から爪先まで一気に痺れ、唇の端から垂れてきてしまう赤く染まった唾液を拭うこともできずにただ身を委ねることしかできなくなる。
「はひっ、んん！　チンポ……お兄ちゃんのチンポがまた大きくなった♪　表面、血管が浮かんでゴツゴツして……くぅっ、あぁ‼　いいよっ、出して！　アヤの子宮にまたお嫁さんの証びゅーびゅーして！　しゅきぃ、しゅきよぉ、お兄ちゃん！」
唇を離して呂律（ろれつ）の回らない嬌声を上げながら、動きにスパートをかける綾音。
メロン大の双丘が少年の胸板をくすぐり撫でるようにたぷんっと揺れ、乳肌の滑らかさとぷっくりふくらんだ肉粒の硬さのギャップが我慢できないほど気持ちいい。
快感神経が活発になった竿肌は休みなく膣粘膜に舐めしゃぶられ、心なしか子宮が降りてきて奥行きが浅くなった肉壺の中で小刻みな痙攣を繰り返す。
あれこれと考えていたことが真っ白な快楽に押し流され、友哉は口内に残っている愛妹

の味を噛み締めつつ、ただ狂おしく背筋を仰け反らせる。
「イィッ……綾音、俺、もうっ！　イク……くふっ、あっ、あああっ‼」
「いいよっ、きてっ！　綾音の子宮に種付けっ、お嫁さんマ〇コに孕ませ射精してちょうだい‼　しゅきぃっ、好き、大好き、お兄ちゃん好き！　愛してるよっ！」
繰り返し、執拗に愛を訴える綾音の膣壺が声に合わせてキュンッと収縮した。
壁面が大きく波打ち、根元まで沈む剛直が扱かれる。
その刺激で、竿肌のあちらこちらにふくらんでいた甘い疼きが一気に弾けた。
「イッ、イク、出る、ううううう！」
ドップリュッ、ビュブブブッ、ビュボッ、ビュルルルルルッ‼
友哉は掠れた声を上げながら熱い迸りを膣奥目掛けて注ぎ込む。
「きゃはぁっ、ああ、いい！　出してぇ……くんっ、アヤもイク……くうう！」
ほとんど同時に愛妹の口からも絶頂の叫びが飛び出す。
それを聞きながら、友哉は長々と続く放出快感に身を委ねるしかなかった。
「うぐっ、あ、まだ……おおおっ」
狭苦しい膣内で休みなく脈動する剛直。
亀頭にしゃぶりついてきている子宮口から肉室へ、そこをすぐに満たし終えると粘膜壁に刻まれている皺の隙間にまで余すところなく染み渡る。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!